書評

張涌泉主編『敦煌経部文献合集』（中華書局 2008.8）

荒見泰史

『敦煌経部文献合集』（全 11 冊）は、『敦煌文献合集』プロジェクト（全国高等院校古籍整理研究工作委員会重大項目、国家十五出版規画重大項目、敦煌文献を経、史、子、集の四部分類による翻刻資料集成に向けた大型プロジェクト）の一環として、2008 年 8 月に中華書局から出版された。この整理出版プロジェクトは、敦煌文献の経部資料における定本の作成を目指したもので、世界の研究機関に分散する敦煌文献の儒家経典類および小学類の文献を全世界の所蔵機関にわたって広く調査し、そのすべての文献を整理、校合して全文を翻刻するという膨大な作業であり、張涌泉教授を中心とする浙江大学古籍研究所スタッフの長年の勤勉かつ地道な研究態度に支えられて近年ようやく完成され得たのであった。

敦煌文献とは、周知のように 1900 年 5 月頃に中国甘粛省の敦煌莫高窟で発見された 4 世紀から 11 世紀頃までの 60,000 点を越える出土文献資料であり、仏教経典、寺院内文書を中心としながら道教経典、儒家経典、文学類、経済文書など多岐にわたるジャンルの文献が残されている。そうした中には、中国における長い継承の過程で様相を変えてしまった書物の元の姿を残すものや、また何らかの理由で継承が途切れ伝世の文献から姿を消してしまっていた書物そのものが残されていることがあり、高い研究価値を持つことはよく知られている。例えば継承が途切れてしまった書物としては、唐代の科挙試験のための国定教科書『五経正義』の選外となった漢の大儒、鄭玄の『論語鄭玄注』がある。この書物は南北朝時代にはおもに北朝で最も重視されていた名著であるが、南北統一後になって国の規範から外された為に徐々に姿を消すことになってしまったのである。また同様に歴史から姿を消した書物としては隋の陸法言『切韻』なども挙げられる。この書物は隋代に漢語音の規範として整理され、唐代に極盛期に達した近体詩の平仄の理論を支えた韻

書であるが、後の宋代になって新たな規範となる『広韻』が整備されたことによって姿を消したのである。歴史的名著とされる書物には、同様に姿を消した書物が数多くある。このように中国の伝世文献から姿を消した多くの書物は、時に出土文献から再びその姿を我々の前に現すことがあるが、敦煌文献はそうした書物の宝庫というわけである。『論語鄭玄注』と『切韻』の2書ともに敦煌文献から一部が姿を現わしている。また、敦煌文献からは、各王朝において数度にわたって整理を経ている中国の伝世文献からは伝わりにくい、古い時代の学術や文化の状況を知り得るという点も重要である。例えば写本に残される記述内容や、唐代の経典解釈に好んで引用される書物の傾向から、一時代の学術の趨勢を読み解くことができるであろう。また、もともと文献によって継承されることの少ない民俗に関わる情報も多く残されている。当時の娯楽として盛んに行われていた俗講や、絵解き芸能の変文、民間の歌辞なども敦煌文献から多く見つかっており、中国唐五代から宋代の芸能を知り得る貴重な資料ともなっている。そのように高い研究価値を持つ敦煌文献は発見当初から学界でたいへんな注目が集められ、「敦煌学」という名称まで与えられて研究が進められてきたのであった。

しかし、これまで敦煌文献研究においては、そのような重要性が認識されてそれぞれの分野において高い水準の研究がおこなわれ、道教文献、文学文献など研究者の研究対象によって分類され目録化されることはあったものの、60,000点余りの敦煌文献全体を整理分類しようという動きはこれまでにはなかったように思われる。その理由は、1つには敦煌文献が中国国内外の多くの機関で保管され公開の仕方も異なるために全容がつかみにくいこと、もう1つにはこれらの敦煌の資料が伝世文献のように整理を経たものばかりではなく、草稿、帳簿などを含むものであり、難解でかつ用途が不明な文献も多いことがあげられる。

敦煌文献が国内外の複数の機関で保管されているのは、発見されてからわずか数年の間にイギリス、フランス、ロシア、日本などの多くの国々の研究者によって大量に国外に持ち出されたことと、中国国内を含め個人蔵書家に広く流出してしまったことによる。こうした経緯によって、外国所蔵の文献に関してはこれまでそれぞれの国によって整理目録化され、図録などによっ

て広く公開されてきたのであるが、整理・目録化の方法や公開の程度、速度には大きな差があった。個人蔵書家に流出した文献に関しては、現在に至っても転売が繰り返され国内外の市場に出回っているほどで、そうした市場から敦煌文献を回収して管理をおこなう公的機関も世界で100機関を超える。そうした文献も徐々に図録などによって公開されつつある、という状況である。このように資料が分散した結果、研究には様々な問題が起こっている。1つには、巻軸写本は紙の接合部分が劣化によって剥離し1つの文献がいくつにも分かれてしまうことがしばしばであるが、そうして断裂した文献が複数の機関に分かれて所蔵されていた場合、研究にも幾ばくかの支障をきたすことは当然であろう。さらにそのような機関の一部で公開が遅れれば、その文献の研究そのものが停滞してしまうことにもなりかねないのである。

もう1つの点も、敦煌文献の全容を把握し整理分類することを難しくしてきた。敦煌文献のほとんどは印刷技術が普及する以前の手書きの巻軸本であり、多くの経籍はそれ以前の時代から書き継がれ継承されてきた書物である。しかし、そうした書物は題名とともに全体が残されている場合ばかりではなく、部分的にしか残されていないことも多い。それらが伝世文献に残されない書物であった場合、それがいったい如何なる由来のものかを確かめることはたいへん難しいことなのである。また、当時に何らかの目的で書かれた草稿、帳簿の類もこれらと混在しており、後世の偽作も混入している。いずれにしても、それぞれの文献の素性を確かめ、書物の由来を明らかにするためには、地道な解読研究を経る以外になく、さらにそれらを整理分類するためには相当な労力が払われねばならない。こうした点は、敦煌文献が発見されてから100年間にもおよぶ先人たちの努力によって、それこそ1点ずつ解決されてきてはいるが、文献総数が60,000点と余りにも膨大であるために、未解決の文献もいまだに残されているのが実情である。

こうした点などによって、敦煌文献を総合的に整理することは困難とされてきたのであるが、『敦煌経部文献合集』では、このような敦煌文献に対し、敦煌文献研究では伝統のある浙江大学古籍研究所（旧杭州大学古籍研究所）スタッフらが中心となり、長年の地道な努力により、経、史、子、集という

中国の伝統的な四部分類によって分類する試みが始められ、そのうちまず経部文献の全てに対して分類整理から全文の翻刻が行われたのである。

本書では、群経類と小学類の 2 種に大きく分類し、群経類では『周易』、『尚書』、『詩経』、『礼記』、『左伝』、『穀梁伝』、『論語』、『孝経』、『爾雅』の 9 種に分類して計 300 点余りの文献を収録している。小学類では韻書、訓詁、字書、群書音義、仏経音義の 5 種に分類し計 1,000 点余りの文献を集め、校合、翻刻に使用した文献は 1300 点余りである。

本書の整理作業では主として、(1) 文献を分類すること、(2) 内容を精査し書名を明らかにすること、(3) 断裂した文献を繋ぎ合わせること、(4) 由来と内容について解説を付すこと、(5) 同一内容の文献を集めて校合を行うこと、の 5 つに特徴がある。たとえば『一切経音義』では 39 点の文献が発見されているが、これらは文献調査によって 16 の写本に分類されて繋ぎ合わされる。そのうちの S.3469、敦研 357 の 2 点は、前者は玄応『一切経音義』巻二『大般涅槃経』第一巻の音義、後者は同一経の第十一、十二巻の音義であり、2 者の間は字体も写本の体裁も一致している同一写本であったと断定しうる。しかしこれまでは一方はイギリスの大英図書館に、一方は中国研究院で保管され、図録によって確認できるのみで研究に不便であった上に、書名も『切韻』とは断定されずにいたためにこれまで正しく研究されずにきたのであった。本書『敦煌経部文献合集』では広く類似する文献を分類整理し、書名を明らかにしているので、このような発見も多く見られている。そしてそのうえでそれぞれの写本が校合、翻刻され、詳細な解説が付されている。

11 巻の内容は以下の通り。

第 1 册　張涌泉主編、審訂　許建平撰
　　群経類周易之属、群経類尚書之属
第 2 册　張涌泉主編、審訂　許建平撰
　　群経類詩経之属、群経類礼記之属
第 3 册　張涌泉主編、審訂　許建平撰
　　群経類左伝之属、群経類穀梁伝之属

第 4 册　張涌泉主編、審訂　許建平撰
群経類論語之属、群経類孝経之属、群経類爾雅之属
第 5 册　張涌泉主編、審訂　関長龍撰
小学類韻書之属（一）
第 6 册　張涌泉主編、審訂　関長龍撰
小学類韵書之属（二）
第 7 册　張涌泉主編、審訂　張涌泉、関長龍撰
小学類韵書之属（三）
小学類訓詁学之属
第 8 册　張涌泉主編、審訂　張涌泉撰
小学類字書之属
第 9 册　張涌泉主編、審訂　許建平撰
小学類群書音義之属
第 10 册　張涌泉主編・審訂、張涌泉撰
小学類佛経音義之属（一）
第 11 册　張涌泉主編・審訂、張涌泉撰
小学類佛経音義之属（二）
附録　敦煌経部文献巻号索引